

「ロビンソン・クルーソー」が教えるもの —教育改革がめざす人間像に関連して

審査委員長

菊池 龍三郎

1. 審査の経過と結果

今年度の応募論文数は全部で108編でした。応募された先生方の意欲とご努力に心からの敬意を表します。多忙な日々にあって研究をまとめるには、相当の決意と覚悟、そして周囲の協力が必要だったはずで、その方々にも感謝したいと思います。

審査は16名の審査委員に加えて、県教育委員会の義務教育課、高校教育課、特別支援教育課の先生方のご協力を得て行いました。予め定めた審査の観点と基準に基づき、複数の委員の目を通し、恣意的、形式的な審査にならないよう十分に留意しました。

第1次審査の結果、優秀賞以上の論文5編、優良賞14編、奨励賞1編を選びました。優良賞、奨励賞はいずれも努力が十分に窺われる論文でした。次にはぜひ優秀賞、さらに最優秀賞を目指してほしいと期待しています。差は僅かだと思って下さい。

第2次審査では、優秀賞候補論文5編について審査し、最終的に最優秀賞1編、優秀賞4編としました。本報告書は、最優秀賞については全文を、優秀賞については概要を掲載しています。多くの先生方にぜひお読み頂き参考にして頂きたいと期待しています。

2. 教育改革が目指すもの

次に、雑感ですが、この審査を通して最近強く思っていることを敢えて述べさせて頂くことにしました。

今、学校と教師が直面している変化は、より根本的で深刻なものです。少子高齢化、過疎化、デジタル革命、IT化、飛躍的に進化するAI技術等により、私達は近い将来に今とは大きく異なる世界を生きることになります。教育もまた抜本的な変革を迫られています。

新学習指導要領では、教師には、知識の多寡を競うのではなく、知識理解の質の向上を図ること、そのため課題解決型・教科横断型授業や児童・生徒主体のアクティブ・ラーニングなどの授業改革に積極的に取り組み、その努力を通してカリキュラム・マネジメントの能力とセンスを身につけることが強く期待されています。なぜ課題解決型の授業が必要か。これからは、予め答えが決まっていはいない時代と社会を生きていかねばならないからです。これまでだったら学校の授業が理解できればそれで十分だった。しかし、その程度の学校経験で得た「学校知」は、これからの時代と社会の「安心パスポート」ではなくなる。質問されてすぐに答えられる程度の知識は、これからは多分あまり役に立たないだろう。こうした予測が脅かしではなく、なんとなく現実味を帯びてきているのは、すべての産業で始まっていた構造改革のピッチが、この数年間を見ただけでも早まり、その改革には人材育成も含まれているからです。

そうした中で、近年、問題を作る力が大事だと言うのを耳にすることが多くなりました。児童・

生徒に、いつもいつも与えられた問いに対して期待する答を返させるだけの受け身の学びから脱け出してほしいという期待を言い換えた表現だと思います。言うまでもなく、児童・生徒の「なぜ?」「どうして?」に突き動かされた主体的な学びの大事さは、いつでも誰でも口にしてきました。しかし、児童・生徒が自分で問題を立てる力を育てることは、生易しいことではないと思います。誰よりも教師自身が、ふだんの授業を、いつでも決まった答を言わせることに終始するスタイルから、問いへの答が次の問いを次々と生み出していく「終わりのない系」としてとらえ直し、発展させる授業を工夫してほしい。問いが問いを生む授業、疑問への解答が新たな疑問を生む授業を工夫してほしいと思います。もちろん、そこで起こる混乱は覚悟の上です。その覚悟と工夫があれば児童・生徒の理解の質の向上と教育実践の発展が期待できると思っています。なお、そうした授業は、たとえ特定の教科の授業であっても、教科横断型の展開を見せることもあると思います。児童・生徒の興味や関心が教科の枠を超えて発展する可能性もしっかり読み込んで授業を企画、設計してほしい、それがカリキュラム・マネジメントというものではないかと考えています。

3. 教育改革が描く人間像について（私見）・・・ロビンソン・クルーソー

しかし、いくら教育改革が目指す方向性をあれこれ語っても、もうひとつ具体的でない、わかりにくいと感じると思います。ではどのような人間像なのか、誰かモデルは考えられるのだろうか。私は以前から、教育改革が目指す人間像とは具体的には、例えば、あのロビンソン・クルーソーのような人ではないかと思っています。先生方と同じく少年時代に胸躍らせて読んだ『ロビンソン漂流記』（1719年）は、実際にあった漂流体験に基づいてD. デフォーが書いた小説です。少年時代の僅かな記憶を大急ぎで図書館で読んだ漂流記で補って概略を述べるなら、クルーソーは、船が難破してただひとり、無人島に漂着します。船に残された僅かな食料と手斧と鉋などの道具、海図、帆布、銃と火薬、ペンとインクと紙、そして聖書を持ち出します。この絶海の孤島で生活を始めるに当たって、彼は今自分が置かれている状況のプラスの点とマイナスの点を挙げ、今後はできるだけプラスの点を生かして明るく生きていこうと決意します。まず斜面にある洞窟を利用して簡単な住居を作り、安全のために柵と梯子を取り付けます。暫くして洞窟を広げ、そこに手作りのテーブルと椅子を据え、しだいに住居を快適にしていきます。大事なことは、彼が難破した日を起点に日記を付け始めることです。これにより彼は生きていくための時間と空間の座標軸、今で言えばGPS機能を自分で作っていると言えなくもありません。今日はキリスト教では何の日、明日は誰の誕生日だから食事はこうしよう、これはしてはいけない、あれはしようと社会の中で生きようとしていることです。自分の存在の位置情報を確認できるように工夫していると言ってもよいでしょう。日記を付けることで以前の経験を生かし、同時に同じ過ちを繰り返すことが少なくなります。要するに、彼がたったひとりの生活であっても常に社会に生きる人間としての生き方を崩さないことです。ただのサバイバル話ではないのです。

ニワトリの飼料用穀物が入れてあった麻の空き袋を地面で叩いて塵を落としたり、暫くして地面から小麦の芽が出てきた時、彼は神に感謝し、それから栽培に努めて、やがて備蓄できるまでになり飢餓の不安を解消します。その間には臼と杵を作り、粘土を焼いて造った竈でパンを焼けるようになります。帰国への夢を実現するために舟作りにも挑戦していきます。それらの作業を信じられないほどの時間と努力と工夫、失敗と反省を重ねて成功させていき、しだいに生きる希望をふくらませ、生活を豊かにしていきます。

長い月日が経った後、島に来た異人種の男達と闘い、彼らに拘束されていた捕虜を解放して従僕

とし、その日が金曜日であったためフライデーと名付けます。フライデーとの共同生活が始まり、彼に英語を教え、ここで孤独から解放されるのです。その後色々な経緯の後に無事イギリスに帰国。彼の無人島生活は28年と2ヶ月に及ぶものでした。

全体を貫くのはクルーソーの困難な状況乗り越えていく強い精神力、与えられた困難な状況を変えていくためにどのような好条件と不利な条件があるのかをいつでも比較検討し、計画を立て、設計図を書き、実行に移していく力です。何よりも注目したいことは、彼が目的に合わせて必要な道具を次々に作りだしていく力、創造力です。この漂流記が出たのはちょうど3百年前ですが、そこで彼が進化させていく創造的知性は今に通じるものです。後世、この小説は単なる冒険小説としてだけでなく、近代社会に必須な合理的知性の姿を象徴的に描いた小説とされるのも理解できます。

フランスの哲学者アンリ・ベルクソンは、主著『創造的進化』において、従来の人間の定義である「ホモ・サピエンス」（知性人）に代わって、それをさらに進めた「ホモ・ファベル」（工作人・道具を作る人）という新しい人間の定義を提起しました。多分、先生方も高校の時の倫理などで聞かされた話だと思います。環境に働きかけて変化させるために道具を作り、さらに道具を作るための道具を考案する。その過程では人間は様々な工夫と反省を積み重ねながら自分を成長させ、発展させていく、そういった創造的な知性の持ち主であるとしています。ベルクソンは、実際にクルーソーを評価しているのですが、私は、3百年経っても、このような人間像の持つ魅力が薄れることはないと思っており、教育改革がどのような人間像を目指すのかと話題になる時、いつでも心の中で、秘かに、「ロビンソン・クルーソー」と呟くのです。